

東京都心近傍臨海部における集合居住形態と都市デザインに関する研究

代表 小林博人 (慶應義塾大学大学院政策メディア研究科准教授)

委員 Peter G. Rowe (Harvard Graduate School of Design, Professor)

委員 Mark Mulligan (Harvard Graduate School of Design, Associate Adjunct Professor)

〔研究報告要旨〕

近年都心近傍の臨海地域には都市(再)開発のポテンシャルが高く存するにも拘らず将来ビジョンが明確に示されていないため、都市生活環境を長期的視野にたって検討し地域特性を生かした実現可能性の高い居住計画の策定が望まれている。

本研究では、このような東京都心近傍の臨海地域における都市環境に鑑み、中長期的な都市発展の可能性を検討した上で、臨海部における都市デザインおよび集合居住の適切なあり方を示すことを研究の目的とする。具体的には、築地・豊海・勝どき・晴海地区におけるインフラ、土地利用、コミュニティ形態、都市景観などの都市環境を規定する諸要件を整理し、開発のポテンシャルを洗い出すとともに、歴史的な水環境との関わり方を考慮したウォーターフロントにおける集合居住の新たな形態を検討した。

本研究は、慶應義塾大学およびハーバード大学大学院デザインスクールとの都市居住に関する共同研究として行われた。東京のウォーターフロントにおける土地固有の問題を歴史から紐解き扱うとともに、広く世界に共通する水際空間利用および集合居住の問題点および発展可能性を検討し、ローカルな問題をグローバルな視点から研究した。

日本固有の水との関わりを分析し、水と共生するハイブリッドな集合居住環境の創造を目指し、超高層建築のみならず、低層・中層の建築形態の可能性を検討するとともに、それらが周囲の水とどう関わるかを具体的形態を示しながら明らかにした。そして具体の敷地を対象に、どのように水を扱い、それらを配置するかの可能性を示した。水を見るだけの存在ではなく、生活の中で感じるものとして取り戻すため、物理的にまた精神的に水を身近に引き寄せる提案を行った。